

鳥声録音家K・T氏について

koberyo1

人は一生のあいだに三つの出会いがあるという。その一つはいうまでもなく人との出会いである。これがあるからこそ、その人ならではの運命にいろどられた「道」を見つけ出すことができる。

ふたつ目はなんであるかという、自然界との出会いである。ヨットとか山登りとの魅力を求めて、これもまた一生の出会いになることが多い。

そして三つ目。それは書籍との出会いである。学者や研究者にならずとも書籍か人生の滋養を無限に汲み出し、これから自分が人生において何を為すべきかを若いうちに直感している人がいる。

K・T君こそは二つ目の自然界、すなわち野鳥との出会いから、たんなる趣味の域を超え、自分の生きる道を創造した人である。彼は野鳥の声の魅力に取り憑かれ、やがては鳥の声を録音しようと考えようになったそうだ。

K・T君はわたしのかけがえのない友人でもあった。

ここでK・T君からわたしが直接、聞いた野鳥の声にかんする蘊蓄を紹介することにしよう。

野鳥たちの鳴き声を総括してわたしたちは「さえずり」というが、このさえずりこそが面白いのである。

他に同じ鳥でも「地鳴き」というものがある。

じつはわたしたちの聴覚は、「さえずり」と「地鳴き」を区分して聴き分けているそうだ。

鳥でもないのにどうして人の耳がそんなことをするのか謎ではあるが、たしかに鳥の声を耳にすればどっちだろう、と無意識の聴き分けを行っているようすなので野鳥の声を聴く習慣のある人は、自然と集中力を身につけるレッスンをしている、というのがK君の唱える説である。

わたしがK・T君と最初に出会ったのは中学生の時だった。ふたりとも早稲田実業学校に在籍していた。中学の友人として出会ったのだった。昭和十五年、五月のことだった。

早稲田実業という学校のムードというか、生徒の気質とでも呼べばいいのか、その趣きは今も昔も変わらず休み時間でも野球が校庭で華やかに行われる。

したがって学校はキャッチボールだけを興じる場になってしまっていた。

野球をしない生徒は肩身の狭い思いをしながら校舎の片隅で談笑していた。わたし

はキャッチボールをしないし、K君もまたそうだった。この時、キャッチボールをしない二人が野球をしない、という縁によって出会ったのだった。

K君は野鳥を中心に植物や昆虫、なかでも昆虫では蝶に詳しかった。

動植物に興味があったわたしは自然と一緒に行動する機会が多くなり、毎日放課後、帰宅の道も仲良く一緒に歩いた。

そのルートが早稲田実業を起点にして穴八幡の裏道をゆき、陸軍連隊の雄大な戸山練兵場の裏から大久保を経て、東京は西新宿にあるK君の自宅まで雨天の日は別にして電車に乗らずに歩いた。

彼が紹介してくれた本はいろいろあった。

中西悟堂先生の「野鳥と共に」や、野鳥の生態をスケッチした「野鳥事典」などを夢中になって読んだりした。実に楽しい毎日であった。

K君自身がのちに上梓した本もある。

1984年に「山と溪谷社」から発行された「美声の鳥20選」という著作をわたしはもっている。これはカセットテープが付属した本であり、二十種もの鳥の美しい声を堪能でき、美しいブックレットもついた素晴らしい本である。

その内容はといえば、ウグイス、コマドリ、オオルリ、オオジロ、メジロ、ヒバリ、シジュウカラ、サンコウチョウ、カッコウ、コヨシキリ、シマアオジ、ノゴマ、ビンズイ、イカル、キビタキ、アカハラ、クロツグミ、アカショウビン、ミソサザイ、ルリビタキの声が収録されている。

わたしの好きな鳥は「尾長（オナガ）」である。

啼く声は少しも美しいとは思われない。「ゲェーイ」という鳴き声である。しかし、それでもわたしは「尾長」のことが好きなのである。

この鳥のことをK君から教えられたのは武蔵野だったと記憶している。武蔵野とは、埼玉県全域と東京のお南端までを昔の人は定めていたが、さてその場所が武蔵野のどこであったかは今となっては記憶は定かではない。

柿の実が色づきだすと、今年もまた、何となく秋か、と思う。

わが家にも「富有柿」が一本ある。

自宅を建てた昭和四十五年ごろ、妻が農協にて八百円くらいで購入してきたもので、

毎年百個から多い時では二百個くらい実をつける木にまで成長した。

秋になると、この木にモズがやってくる。

見通しの良い枝を選んで止まり、尾を上下に動かして、「キーイツ。キーイツ。キィキィキィ」と鋭い声で啼く。

この啼き声は秋の季節感を何となくではあるが、一層助長して与えてくれる。モズと柿という取り合わせは、やはりなくてはならない秋の風物詩なのである。

K君は「モズのいけにえ」について教えてくれた。

モズは肉食性であること。また捕らえた「蛙」、「トカゲ」、「昆虫」などを木の枝や棘をもったカラタチなどの枝に突き刺したり、引っ掛けたりして、保存し、食する習慣のあることを聞いたのである。

中学生の頃は誰でも人生の分岐点に立っているようなものだ。

思春期というものは、毎日が懐疑的である。というのは現在、歩いている道はただしいのだろうか、それとも間違った生き方なのだろうか、と悩む。さらにこれは今、なすべきことなのか、と。

誰にとっても心が安定しない時期ではあるが、K君にはこれがなかった。

彼が考えていることは、いつも野鳥のことであり、鳥の美声を録音することであり、その目標にどう対応し、研究してゆくべきか、常に考えている人だった。

K君は長じてプロの鳥声録音家となった。

彼は録りためた鳥の美声をラジオのミニ番組に1953年の放送開始以来、提供しつづけてきた。その後、若干の紆余曲折はあったものの、放送回数は一万四千八百回以上にもおよびラジオ局の最長寿番組となった。

鳥の声を追い始めてから四年後に日本で初めて野鳥の声を収録したレコードを出したことは、もっと知られてもいいと思う。

また、海外にも出かけ、七十カ国以上で録音した野鳥の声は1000種類を超えた。96年には集大成として、CDブック「日本野鳥大鑑 鳴き声333」（小学館）を上梓した。

これには大自然の厳しい寒さや、外敵との遭遇、――たとえば北海道のヒグマや沖縄のハブ、アメリカのライオンやチーターの襲撃など、多くの困難との出会いを乗り越え

て録音されたものなのである。

あの細い体で、どこにそのような体力と行動力が隠されていたか、と思う。

K君とわたしは年齢はおなじだが、この偉大なる力はどこからやってくるのか、と思うばかり。

平成19年1月15日、K君は肺炎で死去した。享年八十歳。ただただ頭が下がる、偉大な人物である。